

◆コメント◆

『犬からみた人類史』編集からみえてきたもの

My findings through the editing process of *Human History from Dog's perspective*

福井 幸
FUKUI YUKI

編集者
Editor

キーワード

コミュニケーションと翻訳 書籍編集 人間中心主義 書籍タイトル 棚迷子

Keywords

communication and translation; book editing; anthropocentrism; book title; book genre categorization

原稿受理日：2020.1.31.

Quadrante, No.22 (2020), pp.145-147.

コストをかけずに簡単にテレビの視聴率を稼ぐためには「動物・子供・食べ物」である、という言葉説がある。その例にもれず、子犬がテレビに映っていれば必ずチャンネルをそのままにしてしまう。リビングには毎年欠かさず岩合光昭の日本の犬のカレンダーを飾っている。仕事場のパソコンのデスクトップはあるとき衝動的にサモエドの横顔にした。差し迫った状況に置かれると、とあるブリーダーがアップロードしている生後間もない子犬の動画を見る。胸が締め付けられる。

わたしは「犬好き」である。ただしいまだかつて犬を飼ったことはない。色々なご縁があり、本書の企画の編集担当となった。

もはや昨今の東京では、野良犬を見ることがなくなり、わたしは上に示したように、メディアが提供する愛玩の対象としての「かわいらしい」犬、「清潔」な犬を享受して飼い慣らされていた。

殺し合い、使役、性交渉、繁殖、供養……本書に示されている人と犬との関係性と向き合うにつけ、わたしは「犬好き」なのではなく、「愛玩の対象として表象された犬」という限定され

た対象が好きなのである、ということに気づくことになった。これはつまり、常に批判的に事象を読むことを教育されながら、犬と人間の関係という点においては、何一つ疑問を持つことなく、自分の目線には全く無自覚だったということである。

無自覚の人間中心主義を自覚したことは、他者理解をどのように展開していくのかという話とつながっていく。ここ最近、自分にとっての実際の問題として、ジェンダーのことを考える。非対称性が起こっていないか、さまざまな状況において、男女を入れ替えるテストをおこなうことが現時点のささやかなわたしの確認作業だが、人対人の関係性である以上、時々従来の価値観から外れることが難しくなる。

だが、アクセサリとしての犬、愛玩の対象としての犬、加虐の対象としての犬……そんな関係性を考えることは、不思議と雑念を取り除くことができ、さらにこの関係性を対人へ転用することで、他者理解へと応用していくことができる。そういった意味で本書を担当したことは、無自覚を自覚させるとともに、自己を内省することにつながったのである。



＊ ＊ ＊

実際に本書の編集過程におけるエピソードを紹介したい。

どのようなタイトルがふさわしいか、という問題があった。書籍のタイトルは、実際の内容にアクセスするもっとも重要な動機となる。ネット書店での購入ともなればなおさらだ。

よいタイトルとされるものの条件は、本のジャンルに応じて、さまざまにあげることができるが、大きくは以下の三点があげられる。

- ・ 書籍の内容を端的に示している、実際にその本が何について書かれているのかが明快（タイトルと中身が微妙にずれていることもあるが、少しでも読者を増やすための戦略的なケースである場合もある）
- ・ 同一タイトルの書籍が他にない（これはよいタイトルというよりは最低限の条件となる）
- ・ キャッチーである

原稿が出そろった時点での編者側のタイトル案は『犬革命宣言』であった。もちろん、ダナ・ハラウェイの『コンパニオン・スピーシーズ宣言』¹をもじったものである。しかし今だから白状するが、担当当初はあまりに文化人類学に無知であったため、『関白宣言』が頭から離れなくなってしまった。

本書は執筆者陣がかなり心を砕いてくださったことによって、さまざまな分野を横断した論文集でありながら、専門的知識を前提とせずとも、面白く読める内容になっている。だから、価格を少しでも抑え、できるだけ書店に流通する本にしたいと思った。

そのため、なんとしても「棚迷子」は避ける必要があった。書店にはジャンル毎に棚が作成され、本が仕分けられていく。「棚迷子」とは、意図したジャンルとは異なるジャンルに配架されてしまい、潜在的読者にリーチできない

という状況を指す。例えば、歴史上の人物をテーマにしたビジネス書は、ビジネスジャンルの棚に置かれるべきであるが、タイトルによっては歴史ジャンルの棚に配架されてしまう……といったことがままある。書店には日々莫大な量の本が取次から届く。書店員たちが次々仕分けをしていくなかで、その目印となるのはやはりタイトルである。

本書が「かわいいワンちゃん特集」の棚に置かれるのか、自然の生物の棚に置かれるのか、人類史の棚に置かれるのか……。

一般読者への明快さを優先し、『犬革命宣言』は帯部分、序章にて見せることとし、さまざまなタイトル候補を吟味した。「わたしたちと犬」に寄せると、「犬ラブ本」「いぬのきもち本」を連想させてしまうし、「犬と人間の関係」を重視しすぎると、生物学や考古学など、さまざまな分野を横断していることが見えにくくなる。「人類史」に帰結させることの是非はあったが、本書のタイトルは『犬からみた人類史』とし、補足的なサブタイトルはむしろ幅を狭める懸念があるため、あえてつけないことにした。類書がないこともあり、営業的な側面を含めても、本書をどう名付けるかということがもっとも難しい局面であった。

だが、裏を返せばそのことが、人間という営みを考えたとき、「犬」がいかにさまざまなシーンに入り込んでいるのかの証左でもある。タイトルがうまくつけられないということそのものが、この関係性についてあまり考えられてこなかったという現在の状況を示しているともいえる。そういった意味で本書は非常に画期的な書籍といえよう。

＊ ＊ ＊

索引作成の作業からも本書の特殊性が垣間見えた。今回は各執筆者のピックアップした語句に、編集陣が補足し、完成した語句リストを

¹ ダナ・ハラウェイ、永野文香訳（2013）『伴侶種宣言：犬と人の「重要な他者性」』以文社。

もとに作業をおこなった。論文集の索引では、核となるテーマのもとに執筆していたとしても、中心的な語句以外は、ほぼ決まった論文ごとに語句がまとまって表れるのが通常であるが、本書の場合、多様なタームがかなりの頻度で他の複数の論文に出現した。編集の過程で執筆者に相互参照をお願いしたという事情があるのである程度予想されたのことではあるが、そういった箇所だけでなく、編者の意図しないところでも、想像を超えて、各論文が相互に関連し合っているのである。これは新たな驚きであった。犬というテーマは、分野・アプローチを問わず、さまざまなジャンルに重なる議論を生むのである。

* * *

本書の刊行をうけて、関係各所から、猫から見た人類史も作ってくれ、というリクエストも多くあったが、企画として振り返ってみると、視点の多さという観点から人間にとって犬がいかに特別なのかということも見えてきた。

本書に関連して、書評会をはじめとしたさまざまなイベントをおこなったが、会場からあがる犬についての質問は、実際にイベントにおいて話された内容に限らず、実体験をとともうもの、想像上のこと、尽きることはない。

本書に組み込めなかった問題は数多くある。ケアにおける犬、ロボット犬、表象される犬……カバーしきれていない年代・地域もある。

日本人だけが話題にすることかもしれないが、「猫と犬のどちらが好きなのか」という聞き方をよくされる。しかし、そういう時でも犬に無関心という選択肢は用意されていない。犬好きはもちろんのことであるが、犬嫌いも結局のところ犬とのおおきなつながり、かかわりの輪のなかに含まれているのである。

本書を嚆矢として、犬と人間との関係を再考する書籍が多数刊行されることを期待したい。